岡田淳「竜退治の騎士になる方法」考
――今を生きる子ども達――

箕野　聡子

はじめに

岡田淳の児童文学作品の多くには、母子家庭・父子家庭で育つ一人っ子が登場する。「扉のむこうの物語」（理論社、1987）では、母を亡くした少年が、父の勤め先の小学校の倉庫にあった扉から異界へと旅立ち、「びりっかすの神様」（偕成社、1988）では、父を亡くした少年が、母の新しく決まった勤め先近くの小学校に転校した時から不思議な人物が見えはじめる。他に「学校うさぎをつかまえろ」（偕成社、1986）、「もうひとりのぼくもぼく」（教育画劇、1992）、でも、母子家庭の子どもが登場し、その家庭環境が物語のテーマに役割を加えている。そして、「竜退治の騎士になる方法」（偕成社、2003）においてもまた、主人公康男の幼なじみである優樹が、母子家庭の一人っ子として登場する。彼女等に共通するのは、ひとりで過ごす時間が長いということだ。

社会的にみると、この事実は多く教育的非難の対象となりやすい。すでに高学年となり、放課後を学童保育の時間として学校で過ごすこともなくなった年長の小学生にとって、この時間はともすれば危険をはらみやすいとみなされるからである。しかし、親は経済的な問題から働かなければならず、核家族化が進む現代社会においては、親族や隣人に子どもの世話をたのむわけにもいかず、子どもは一人の時間を自分の力で乗り越えなければならない。

国や地域は、この子ども達のためにさまざまな政策を実行していくだろうが、その政策が実を結ぶまでには、多くの時間が必要となるであろう。今現在、孤独を抱える子ども達に、その政策は間に合わない。

岡田淳の児童文学は、今この現実に対峙する子ども達にむけられたリアルタイムのメッセージである。現代児童文学の先駆的存在である作者がみる現在の子ども達の生き方を、「竜退治の騎士になる方法」を中心に考察していきたいと思う。

1　「ひとり」の「夕食」

物語の冒頭は、康男が「ひとり」で「夕食」をとろうとするところからはじまる。康男は一人っ子ではない。両親と姉との帰宅が遅くなることが「たびたび」あり、「ひとり」で「夕食」をとることには慣れているのである。現在の社会において、子どもが一人で夕食をとることは、必ずしも珍しいことではない。

孤食の問題は、社会的問題として現在大きく取り上げられている。『こども白書2005』には、ＫＦＤ（動的家族画）調査の結果が発表されており、小学校五、六年生の描く食卓風景の絵に〈人〉がうまく描かれない場合が多いことが指摘されている。それが、「不登校、対人緊張、いじめ、神経症反応、ひきこもり、家庭内暴力、摂食障害、自傷行為、非行行為など、さまざまな現れ方で『かかわりの力（対人関係能力）』の低下にともなう不適応や問題行動」(1) をおこすおそれがあると心配されているのである。

ところが、康男は一人で夕食をとる自分の状況を楽しむのである。「ささやかな冒険」、「ひとりぐらし」みたいな気分で、「ラップでつつんだ」ご飯をあたため、残りものをそろえ、目玉焼きを作ろうとする。この明るさの中

には、前述のような問題はみじんも感じられない。さらに、目玉焼きを作るのに、こしょうが足りないことに気づき、コンビニへ買いにいこうとするあたりには、現代文明に順応する子どものたくましささえ読みとることができるだろう。だが、優樹の場合はそう簡単にはいかない。母が夕方から勤めにでている優樹は、「ほとんど毎日、ひとりで晩ごはん」を食べねばならず、「近所の食堂、ラーメン屋、お好み焼き屋」で一人で食事をとっているのである。しかし、優樹は、康男とコンビニの前で出会ったこの日、「自分で晩ごはんをつくる」康男を、「えらいなあ」とほめる。

孤食の問題を自分の楽しみとして解決しようとする康男の姿は、この問題を子どもの側から解決しようとするひとつの方法である。もちろん、そのような機会が「たびたび」ある康男と、「ほとんど毎日」である優樹とには、大きな差があり、簡単には解決できる問題ではない。しかし、物語の終りに、優樹が康男の家に来て、「ふたりで晩ごはんをつくって食べた」場面が用意されたことは、優樹のこれからの夕食が以前とは変わっていくであろうことを十分に示唆するものとなろう。ただ単に、孤食を親の問題としてしまうのではなく、子ども自身のささやかな工夫で、変えていくことができるものでもあるということを、康男の行動はここで示しているのである。

2　「将来の夢」

康男と優樹とがコンビニの前で出会ったこの日、六年生の彼等のクラスには宿題がでていた。「ひとつは将来の夢について」、そして、「もうひとつ」は「その夢を実現させるために、どんなことをしているか、あるいはどんなことをしていけばよいと思うか」について書いてくるというものであった。授業中、優樹は、「夢のないもんはど

ないすんねん……。」とつぶやく。このつぶやきを、康男は聞いていて、「なんだかとても重要なことというか、きいてはいけないことをきいてしまったような気」がするのである。(2)

現在の子ども達の「将来の夢」は、どのようなものなのであろうか。二〇〇四年の「朝日新聞」の調査では、小学生が将来希望する職業の男子の一位は「スポーツ選手」、女子の一位は「保育士」となっており、最近の十年に特に大きな変化は見られない(3)。しかし、その夢に向かう方法をみたとき、この数年新たな傾向がみられたように思う。例えば「13歳のハローワーク」(4)がベストセラーになり、各種職業への道が年少者に具体的に示されはじめたことである。そしてそれにともなうように、小学生向けに、職場見学会(5)や夢の実現のための講座(6)が各地で開かれはじめた。また、教育の充実のための各種雑誌が創刊(7)され、家庭学習ドリル(8)が爆発的に受け入れられたのである。経済低迷による社会への不安から子どもを解放しようとして試された数々の試みには、幼い時から将来目標を設定し、そこに向かって邁進する子ども達の一途に努力する姿が重なる。(9)

だが、これらの教育の裏に囁かれる不満として、これらの教育方法が家庭学習法であり、子どもの勉強に付き添ってやれる親を持つ家庭環境がなければ、実現しにくいというものがあげられる。確かに、教育の基本といわれる「早寝、早起き、朝ごはん」(10)にしても、例えば、夜遅い母の帰りを待っている優樹のような環境の子ども達には、実現不可能な目標である。将来の目標を、幼いうちから見据えることは、現在の大きな傾向ではあろうが、一部の子ども達のものでしかない。では、優樹の「夢のないもんはどないすんねん……。」というつぶやきは、どのようにすくいあげればよいのだろうか。

忘れて帰った宿題のプリントを取りに戻った夕暮れどきの教室で、彼等は、ジェリー(ジェラルド)と名乗る「竜退治の騎士」に出会う。康男は明日の観劇会の準備のために学校にやってきた俳優だと感じるのであるが、優

樹はそれと気づかないまま、ジェリーと、竜退治とはどのようなもので、その騎士には「どうやったらなれる」のかを語り合うのである。そこで、ジェリーは自分が出会ったある女性騎士に教えられた言葉を語る。

「竜退治の騎士になりたければ、あなたが用をすませてトイレから出るとき、あなたのはいたスリッパはもちろん、すべてのスリッパを、つぎにつかう人がはきやすい向きに、きちんとそろえるのです。」（中略）

「本気でトイレのスリッパをそろえることができれば、そのことから、自分のつぎの課題をみつけることができるでしょう。」

そして、その女性騎士は、つぎの課題をみつけることができなければどうなるのかと尋ねたジェリーに、それでは「竜退治の騎士」にはなれないと答えるのである。

ジェリーは、「竜退治の騎士」になる方法はひとつではない、と優樹に前置きした上で、しかし自分は「ひとの気持ちになること」からはじめた、と説明する。優樹は、容易にはこの話を信じようとはしない。「じれて」「まゆをよせ」「質問」をし、「くいさが」る。だが、最終的に優樹は、自分もまた、「竜退治の騎士」を将来の夢とし、そのために「スリッパをそろえ」るのだと、宿題のプリントに書きつけるのである。

「竜退治の騎士」は、勿論現実的な将来目標ではない。そして、これは勿論たとえではあるのだが、「スリッパをそろえ」ることは、夢に直結する手段でもない。しかし、それは、将来の夢を開く手段とはなる。決定した目標にむかって幼いうちから具体的な努力をはじめてしまうことによって、変更が難しくなる将来を見つめるのではなく、今という時を、考え生きることによって、次の課題を自分自身で見つけ出し、その積み重ねによって開けてくる未

来を受け入れようというのである。

今という時を、自分で考えて生きること。現在の子ども社会から忘れられかけている生き方の提案と捉えていいだろう。「夢のないもんはどないするねん……。」という優樹に対し、ジェリーは今を生きることを考えればいいと提案したことになる。そして、そのような生き方は、ひとりの時間を長く持つ彼等にこそ可能なのだと物語は示してくれるのである。

3　異界への入り口

「竜退治の騎士になる方法」は、ファンタジー作品である。康男と優樹とは、実際に竜と格闘するジェリーを目の当たりにすることになり、自分達もまた、竜退治に参加することになる。異界への道は、物語の中に周到に用意されている。まず、いつもはあまり話もしない康男と優樹とが、今日に限って、行動を共にしたということである。かつては、「おなじアパートに住んで」「おなじ保育所にかよって」「ゼロ歳児から」共に育ったふたりが、現在のように疎遠になったのには、「三つのこと」が重なったからであった。「優樹の父さんが家を出ていき、谷川優樹は井口優樹になった」こと。康男のほうが「アパートを出て、近くのマンションへ引っ越した」こと。そして、「三年生にな」ってから「別のクラス」になってしまったことである。そのふたりの環境が今日は「三つ」とも近づいていたのである。康男の両親も姉も今日はいない。コンビニという所属性のない場所で出会った。そして、この時ふたりは同じクラスで同じ宿題を抱えていたのである。夕暮れ時の誰もいない教室に、後に異界へ旅したことの証拠品となるコンビニで買ったこしょうの瓶をポケットにしのばせたまま、ふたりは学校に侵入する。ここで、異界

への案内人となるジェリーに出会うことになるのであるが、では、この異界は、彼等にとってどのような意味があったのだろう。

子どもは、見立て遊びが好きである。センダックの絵本「かいじゅうたちのいるところ」(11)は、この見立て遊びが的確に表現された絵本である。大暴れしたことで、「この、かいじゅう！」と母親に叱られた少年は、母親に対し「おまえを　たべちゃうぞ！」と反抗し、夕ご飯抜きで自分の部屋に閉じこめられてしまう。そこで、その部屋をジャングルや大海原に見立ててかいじゅうたちの住む島へたどりつき、そこの王様になるのであるが、やがてあきてしまう。夕ご飯抜きでかいじゅうたちを眠らせた少年は、家に帰ろうとするが、かいじゅうたちは、「たべちゃいたいほど、おまえがすきなんだ」といって少年を追いかけてくる。少年は無事帰還し、自分の机の上に置いてあるあたたかい夕食をみつけるのであるが、この見立て遊びのなかで子どもが経験したのは、叱られた自分と叱った母親との感情の反復と納得である。「たべちゃう」といった台詞が「すきだ」という内容を包含し、少年は、母との関係性をとりもどして帰ってきたのである。

異界は、そこに旅する者の内面から立ち上がってくる。そして、異界での出来事は、現実をうつし、異界でのそれに向かうことが現実に向かう力を与えることが多い。子どもは見立て遊びや幻想のなかに、直接には立ち向かえない現実を登場させ、それに向かう方法を模索し、現実に立ち向かう力を得ようとするのである。

4　「竜」とは

では、「竜退治の騎士になる方法」で、ふたりが異界において立ち向かった現実とは、何であったのだろうか。

ふたりが異界で実際に戦った相手は、「竜」であった。では、この「竜」とは、何を意味しているのだろう。

岡田淳の作品には、よく、「竜」が登場する。「二分間の冒険」（偕成社、1985）にも、「はじまりの樹の神話」（理論社、2001）にも、「竜」が登場するが、これらの「竜」はそれぞれ、違った役割を担っている。「二分間の冒険」に登場する「竜」は、悪の象徴であり、倒されるべき存在であった。それに対し、「はじまりの樹の神話」にでてくる「竜」は、畏れられ、ときにはいけにえを捧げなければならない神的存在であった。前者は西洋の「竜」のイメージを継承し、後者は、東洋の「竜」のイメージを継承しているといえるだろう。

「竜退治の騎士になる方法」の「竜」は、題名の「退治」・「騎士」という言葉が示すとおり、倒さなければならない、悪の象徴としての「竜」である。つまり、「二分間の冒険」の「竜」に近い造形がなされている。ここで注目しておきたいことは、「二分間の冒険」の「竜」の悪が、実は人間との悪の契約によって生れたものであったということである。「二分間の冒険」の「竜」は、子ども達に倒された途端、その悪の契約によってまとっていた「うろこ」を落とし、生れたままの姿（オオサンショウウオ）に戻る。つまり、「竜」は人間がつくりだしていたというのである。

「竜」をつくりだしていたのは人間であったという発想は、「はじまりの樹の神話」の「竜」においても言える。ここに出て来る「竜」は、松谷みよ子の「龍の子太郎」（1960）の母のように、掟を破り、限られた村の食糧を口にしてしまった人間が変化してなったものであったからだ。つまり、ここでも「竜」とは人間がつくりだしたものであった。

康男はジェリーの話を聞いている途中で、「竜って、みんなのとげとげしたところとかの、いやなところとちゃうやろか！」と叫び、また、竜退治が終わった後には、それはみんなのものではなくて「ぼくと優樹のとげとげし

たところ、よそよそしいところ、わざとらしいところでできあがっていた竜なのではないか」と回想する。「竜」が、人間のつくり出したものであったとすれば、康男のこの考えはどちらも間違ってはいないであろう。では、優樹にとって「竜」は、どのようなものであったのだろうか。

問題になるのはふたりが見た異界が、同じようにふたりに開けていたのか、ということである。このことは、ふたりの異界への接触の仕方、また、異界からの影響力の違いから考察することが可能だ。先に異界の「竜」が見えたのは優樹の方であった。康男は、落ちてくる机と椅子とを優樹が背中でささえて彼をかばって、はじめて「竜」をみることができる。つまり、異界は康男よりも優樹に、開けていた。このことは、次の日に提出した彼等の宿題の答えの違いにも表われる。康男は有り余る夢の中から、「アニメ映画をつくる人になる」ことを選んで記す。一方、優樹は真剣に「竜退治の騎士」になることを記すのである。優樹にとって、昨日の「竜退治」は、過去のものではなく、今もなお彼女の生活に影響を及ぼす出来事であった。優樹には、倒さなければならない「竜」がまだまだいたということだろう。康男より多くの現実問題を抱えている優樹は、異界の力を借りながら、それらひとつひとつに向かいあっていくことを、この時、決心したのだ。しかし勿論それは、優樹を悲壮な決意に追いやったというのではない。

岡田淳の作品には珍しく、この作品は、大人になった主人公が子どもの頃を〈回想する〉形式で描かれている。事件から十五年後、康男は本屋に勤め、しかしいまだたくさんの夢を抱いて生きている。そして、優樹は小さな劇団の女優になり、康男の「どう？　竜退治の騎士に、なれたん？」という問い掛けに、「ぼちぼち、ね。」と答えるのである。自分らしさを失わず、決して急がず歩んできたふたりの十五年が、この台詞に想像される。これもまた、現実に向かうことを、異界というフィルターを通してからはじめることを教えてくれた案内人に出会えた故である

といえよう。

この作品には、物語がはじまる前の扉に「うそでなければ語れない真実もある」というジェリーの台詞があげられている。一見矛盾するように思えるこの言葉であるが、フィクションの世界をとおし、現実に対峙することを学ぶ子ども達にとって、これほど誠実な言葉はない。

5　異界への案内人

岡田淳が描く異界への案内人には、特徴的なパターンがある。「雨やどりはすべり台の下で」（偕成社、1983）の雨森さん、「びりっかすの神様」のビリーと共通するものであるが、案内人の役割を果たした後、再び彼等の前に姿を現した時、そのものたちが、案内人とは別のものとしてたち現れるという特徴である。雨森さんはただの隣人として、ビリーはクラス担任の先生の疲れ果てた姿として、そして、ジェリーは観劇会の俳優として、案内人であったことは露程もみせぬ様子で現れる。ここには、子ども達が理想とする大人の姿が描かれているといえるであろう。親でも友人でもない彼等は、決して自分の価値観を子ども達に押し付けたりはしない。しかし、彼等は、全く新たな価値観を持った他者として、ある特定の期間だけ子ども達と関わってくるのである。このような他者との出会いの機会をより多くもつことは、子どもが現実を多角的にとらえる契機となろう。しかし現在、そのような他者との出会いを保障する時間と空間とを確保できる状態の子どもが減ってきているのも事実である。そんな中で、このような他者と向き合えるのはむしろ、ひとりの時間を長く持つ、優樹のような子ども達であることが、この物語には示されていったといえよう。

おわりに

岡田淳は、西宮市の小学校の図工の教師であり、神戸市に在住している作家である。「竜退治の騎士になる方法」は、その岡田淳が、はじめて関西弁を用いた児童文学作品である。康男も優樹も会話の部分はすべて関西弁で語られている。そして、何より「おれは竜退治の騎士やねん」と語るジェリーの関西弁は、彼等の担任の教師が共通語で語るのとは非常に対象的である。現在、方言の重要性が見直され、多方面で紹介されているが、方言がその力を最も発揮するのは、同じ言葉を話しているという、連帯感においてである。ジェリーは、方言を用いることで、康男や優樹との距離を縮め、自分の言葉を身近に届けてくる。しかし、時折共通語を使い、芝居じみた台詞を語ることで、逆にその距離を保っていくのである。この繰り返しの中で、他者としての立場を明確に示しながらも、ジェリーは、彼等に近い距離で彼等の心を掴み、共通の時間に共通の体験をなし得ていくのである。

方言以外にも、この物語には関西を意識した内容がいくつか出て来る。ジェリーがはじめて竜退治の騎士にであったという林間学校（現在の自然学校）に関する記述がそれである。現在、兵庫県の小学校では五年生を対象にした自然学校で五泊六日のキャンプを行っているが、ジェリーが体験したようなこれだけの長い期間のキャンプを行っているのは、全国でも兵庫県のみである。長い日数を親元を離れて暮らすのには子ども達にも多くの不安があるだろう。この時、子ども達の支えになるのが、キャンプリーダーと呼ばれるボランティアの大学生たちである。日常生活とは違う場で、新しい価値観を持った若い大人に、限られた日数だけ出会うこの機会は、まさに、異界とその案内人の構図に相応しいものである。子どものころのジェリーが出会ったのは、こういったキャンプリーダーのひとりであったかもしれない。ジェリーが語る青空センターでの場面は、兵庫県が行う五泊六日といった長いキャ

ンプの中ではじめて現実味を帯びて提供されてくる。

さらに、康男の家庭状況に注目してみたい。物語冒頭に、康男がひとりで夕食をとろうとした場面があったが、そこで、彼が探し出した残り物のリストを確認してみたい。「ひじきと豆の煮た」もの、「だいこんのつけもの」そして、「いかなごのくぎ煮」である。この全ては、兵庫県を中心とした関西の特産品である。康男の孤食が暗く感じられないのは、このような要素があったからだ。例えそれがひとりの食卓であったとしても、郷土という確かな共通項でつながっているという安心感が、その食卓を満たすからである。

また、物語終盤において竜退治のために、こしょうの瓶を投げつけた思いつきについて康男が優樹に語る場面に、落語の「〈くしゃみ講釈〉」をヒントにしたという話がでてくる。康男の父が好きな落語の演目のひとつであるというのだが、この演目は主に上方落語で演じられているもの(12)で、戦前には五代目笑福亭松鶴が、また、昭和四十年代には三代目笑福亭仁鶴が十八番とした有名な演目である。「こしょう？　そんな落語があったなあ。」とジェリーを笑わせたこの竜退治のオチは、物語を前向きな明るさを持ったものとするのに、大きな役割を担ったといえるであろう。

「竜退治の騎士になる方法」は、岡田淳の作品の中でも、特に明るい調子で語られていく。「夢のないもんはどないすんねん……。」という優樹のつぶやきにみられるように、扱われたテーマはこれまでの作品よりむしろ重いものであったといえよう。この重さを補う役割も含めて、この作品には異例に多くの郷土色が取り入れられた。その結果、「竜退治の騎士になる方法」は、関西という土地に生きる子ども達の生活をもうつした作品となり得たのである。そしてまた、「自分を育ててくれたことばに、ほこりを持たんでどうすんねん。」といったジェリーの言葉は、子ども達が、自分が育てられている環境、現実を肯定していく力を期待したものととらえることもできるのである。

註記

(1) 室田洋子「食卓から見える家族」（日本子どもを守る会『子ども白書』草土文化、二〇〇五年八月）

(2) 「天声人語」（「朝日新聞」二〇〇六年三月二四日）朝刊、一面には、「授業料の免除や給食費の援助」を受ける小学生が七割に達した東京都内の小学校では、「卒業文集のテーマ」を「将来の夢」にしようとしたところ、「3分の1の子が何も書けなかった」ことが記されている。

(3) 「将来の希望の職業」（「朝日新聞」二〇〇四年五月五日）高知朝刊、二六面の記事であるが、同じような内容が、平岡妙子「小5が抱えるクライシス」（「AERA」、二〇〇六年二月二〇日）にも見られる。

(4) 村上龍・はまのゆか『13歳のハローワーク』（幻冬舎、二〇〇三年一一月）

(5) 山根由起子「将来なりたいもの、ある？　一緒に職場見学へ」（「朝日新聞」二〇〇五年九月一六日）朝刊、二二面に詳しい。

(6) 「子どもに夢実現力『起業』キーワード、講座が人気」（「朝日新聞」二〇〇五年四月一九日）朝刊、二三面には、「将来、社会で夢の実現が出来る実践的なスキルを身につけることをうたった」講座が紹介されている。

(7) 「日経　kids ＋」（日経ホーム出版社、二〇〇五年三月一八日創刊準備第一号発売）には、「この子が大人になるころ、仕事はどうなる？15年後のハローワーク」などの特集がある。

「edu」（小学館、二〇〇五年三月一九日創刊発売）には、「かわいい子には徹底反復。『陰山メソッド』大特集」などの特集がある。

「プレジデント　Family」（プレジデント社、二〇〇五年一一月一七日創刊発売）には、「頭のいい子の親の顔　現役東大生100人の小中学校時代の徹底調査」などの特集がある。

(8) 「AERA with kids」（朝日新聞社、二〇〇六年三月一五日創刊発売）には、「読ませたい本　見せたい映画　ベスト150」などの特集がある。

(9) 陰山英男『百ます計算』（小学館、二〇〇二年一二月）は、その先駆的役割を果たした。

(10) 平岡妙子「小5が抱えるクライシス」（前掲）や、中村浩彦「小学生向け理科実験塾、続々」（「朝日新聞」二〇〇五年六月一一日）夕刊、一面などをはじめとし、子ども達の努力する姿は、中学・小学受験への興味の高まりとともに多くのレポートとして報告されている。

(11) 陰山英男『早寝・早起き・朝ごはんノート』（講談社、二〇〇六年一一月）の出版で、再度注目が高まってきた。

(12) モーリス・センダック『かいじゅうたちのいるところ』（冨山房、一九七五年一二月）

「くっしゃみ講釈」（笑福亭松鶴『上方落語』講談社、一九八七年一〇月）